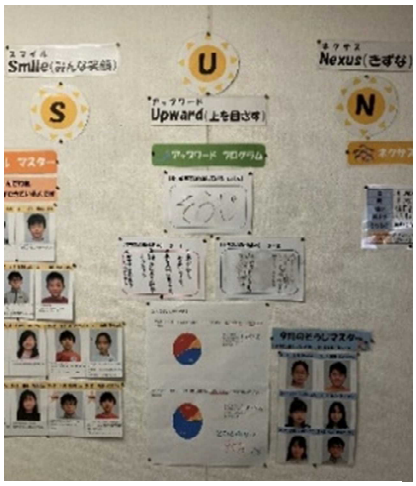
伊東市立大池小学校　教諭　丸井　純

《受賞分野：特に優れた実践（ＰＤＣＡサイクルの機能した学年経営のサポート）》

本校は、重点目標「主体的に『考動』する子」のもと、子供の主体的な活動を促すとともに、教師も主体的に学年・学級経営に参画することに力を入れています。

各学年・学級においては、重点目標と直接的に整合性のとれる学年・学級目標を設定し、それに向けた取組は学年主任を中心に各学年で計画、実践しています。しかし、学年に委ねただけでは、何を目指し、そのためにどのような活動をし、それが達成できたかが不透明になってしまうため、教務主任として、進捗状況を把握すると共に、取組のサポートをしました。

学年・学級目標は、定期的に振り返らなければ、児童も教師も達成状況が分からず、単に掲げてあるだけのものになってしまいます。そこで、児童も教師も成果や課題を捉えて次の目標を立てやすくするために、各学年の取組に応じたアンケートを実施し、定期的に振り返り、その結果を数値化またはグラフ化することとしました。どのような項目でアンケートをとるのか、どのような媒体でどのように集計するのか、次の期間の目標のアドバイスなどを教務主任として行いました。アンケートフォームの作成、集計、グラフ化などが難しい場合は、ICT支援員の協力も得ながら進めていきました。



ある学年の学年目標、実践内容、
振り返り結果等を示した掲示物

本実践の達成状況を把握するために、学校評価の重点目標の項目「主体的に『考動』する子を育てるための教育活動、学年・学級経営を行った」の、１学期末と２学期末の達成状況を比較しました。４段階評価で、Ａ＋Ｂの合計１００％を目標とし、２学期末には目標を達成することができました。しかしＡの人数が少ないということが課題として浮き彫りとなりました。取り組み始めたばかりの１学期末と比べると、２学期末は「主体的な考動」を促す取組は行ってはいましたが、成果として十分な手応えを得られていない可能性が見られました。それでも、多くの教員が主体的な教育活動や学年・学級経営を実践できていることは分かりました。

例えば、月ごとに振り返りを行っている学年は、結果をもとに次の月にどのような力をつけていきたいかを担任が見据え、子供たちと目標を共有ながら実践している様子が見られました。先の学校評価の結果においてもＡと評価をしている傾向にありました。

一方、学期ごとに振り返りを行っている学年は、決して主体的な取組をしていないわけではありませんでしたが、学期途中に取り組んだ活動を終えてどうだったのか、次の期間何を目標に過ごすのかについて、教師も子供たちも認識が薄い可能性がありました。振り返りの時期や回数は学年に委ねましたが、学期終わりでは期間が長期になってしまうため、行事や活動が終わった段階で振り返りを行うとより効果が発揮される可能性が見えてきました。

以上のような、数値による振り返りの結果は、客観的な結果として、教師も子供たちも今何ができていて、次に何を頑張ればよいかが分かりやすいと考えます。同時に、教師の勘による主観的に見取ったことも、感覚としては大切であるため、両者をバランスよく生かしながら、活動を振り返ったり、次の目標を立てたりしていくＰＤＣＡサイクルが機能するよう、これからも各学年のサポートを行っていきたいと思います。

島田市立金谷中学校　教諭　仲田　和隆

《受賞分野：特に優れた実践（生徒が探究的に学ぶ取組）》

情報化やグローバル化が進み、社会の変化が激しく予測困難な時代になっている中で、従来重視されていた「学力」以上に、より複雑でなかなか答えが出にくい、いわゆる「『正解のない問い』に向かう力」が重視されるようになりました。そのような中で私たち教員が求められている授業力についても、新たな価値観や教育観が必要になっていると感じます。そこで、「探究」をキーワードとして、総合的な学習の時間や教科の授業の中で、生徒が問題の発見や課題解決をして、探究的に学ぶことができるような取組を考えました。

総合的な学習の時間においては、地域性をいかして、地元自治体や企業の方からいくつかの課題を提示していただき、「課題解決学習」を進めました。生徒は課題に対して、調べたり、アイデアを出したり、担当者と語ったり、実地訪問をしたり、まとめたりと様々な切り口で進めていました。その中で新たな問題や課題にぶつかる生徒もたくさんいましたが、徐々に考えが深まっていく様子が見られました。

企業の方と話す生徒の様子

教科の授業においても、生徒が問題を発見したり、課題を解決したりできるように場面設定や選択の機会を設ける工夫をしました。担当する教科「技術」において、材料加工での製作時に「工具の選択」や「製作工程の自己判断」ができるような準備をして進めました。生徒が自ら加工方法を調べて深めていて、今まで以上に積極的で主体的に活動する様子が見られました。完全な作品を目指すのではなく、製作の中での迷いや失敗が、生徒にとっての経験やプラスにもなるため、一つの言葉かけについても意識するようになりました。

「選択・判断」のためのカード

これらの取組で見られる生徒の姿勢は、まさに「探究」だと感じました。このような生徒の姿勢を生み出すために、教員は今まで以上にカリキュラムマネジメントや生徒の動機付けへの継続的な関わりが必要になると感じます。今後も学習指導部長や研修部長など、組織の核となる教員との連携を図り、自らも全体への発信をする中で、現在求められる教育に真摯に向き合っていきたいです。

袋井高等学校　教諭　田原　由久

《受賞分野：特に優れた実践（「課題発見型・デザイン思考型」探究活動）》

法多山本堂に映し描いたプロジェクション・マッピング

従来、全日制普通科高校と言われる学校は生徒を希望の上級学校に進学させることができれば、高校としての責任は一応果たしたと言えました。

しかし、VUCA の時代と言われる現代は、もはやそれだけでは生徒の生涯にわたる幸せを保障できなくなっています。激しく変化する社会をきちんとまなざし様々な課題と格闘するマインドがなければ、もはや一流の人材とは言えなくなる時代が来ている、高校段階からそういうマインドを育てていかなければならないという問題意識は校内で共有されていました。

そういう土壌の中でスタートしたのが本校の「課題発見型・デザイン思考型」探究活動です。SDGS や環境問題等のすでにどこかで聞いたことのあるような課題をテーマとしたら基本的には不採用という点も職員間で共有されていました。

「日常の蛙化現象徹底解剖」「10 代がどっちでもよいという言葉をできるだけ使わないようにする方法」「二酸化炭素を削減するためにゼオライトを広める方法」など今まで我々教員が考えたこともないような切り口のテーマが全部で 140 ほど生まれ、2 月には校外の関係者が 100 人ほど来訪する中で成果発表会も行われました。

本校のこの探究活動は令和 4 年度にスタートしたのですが、スタートしてから 1 年後の令和 5 年 4 月、思いもよらない大きなイベントを開催したグループも出てきました。袋井市には「ふくろい遠州の花火」という全国的にも知られた大きな花火大会があるのですが、コロナ禍により 3 年にわたり中止になっていました。袋井市の外から人々を呼び込むことができなかった現状を問題視したパソコン部の生徒たちが遠州三山の一つ法多山の本堂で花火に匹敵するショーとしてプロジェクション・マッピング・イベントを企画し、市役所、地域の大人、企業、大学、技術集団を巻き込んで、数百万円の費用と高度な映像技術を必要とするイベントを成功させてしまったのは驚きでした。こういう活動が出てくるには数年は掛かるだろうと思っていたのでうれしい誤算となりました。

私の所属していた研修課は令和 6 年度に進路課と統合して進路研修課として再出発し、探究活動だけでなく、グローバル教育、キャリア教育、進路指導を一元的に扱う大きな分掌となりました。これらの教育活動を有機的に結び付けて、日本だけでなく世界でも通用する生徒を育てるのが次の目標です。

沼津視覚特別支援学校　教諭　遠藤　芙美

《受賞分野：特に優れた実践（ICT を効果的に活用した音楽科の授業づくり）》

近年、ICT を学習の場面で用いる機会が増え、本校の児童も１人１台端末を活用した学習場面が多くなりました。私は、視覚障害のある児童に対して、ICT を効果的に取り入れた音楽科の授業づくりに取り組んできました。

演奏をタブレット端末に取り込む作業の様子

音楽科の授業では、タブレット端末を使って教科書を見ることが増えました。弱視の児童が個に応じて見やすい文字の大きさに拡大したり、教科書に直接ポイントを書き込んで活用したりすることができ、より分かりやすく学習を深められる手立てとなっています。

また、タブレット端末のアプリを用いた学習場面も増えてきました。小学部での実践の一つを紹介します。

音楽科の教科書では、複数のパートを楽器や演奏の順番を工夫してグループで音楽づくりをする活動が掲載されています。本校の児童数は大変少ないため、音楽科の授業を２、３人で行うことが多く、これまで複数パートで演奏する活動では音楽科担当以外の教員が加わってパートを担当することで学習を進めることが多くありました。しかし最近ではタブレット端末のアプリを活用することで、各パートの演奏をアプリに取り込み、それらを編集して音色を決定したり、演奏順を変えたりして音楽づくりをしています。複数のパートを同時に演奏する必要がなくなり、児童だけで音楽づくりの学習を進められるようになりました。アプリを活用するために、楽器等の英語表記の日本語訳を作っておいたり、文字の拡大ができないのでモニターに接続して見やすくしたりする方法を考えていましたが、多くの児童はすぐに操作方法を覚え、自分なりの方法でやりやすい方法を考えて、主体的に取り組む姿が見られました。今後自分で作曲や編曲をしたいと思った時に、きっとこの経験が大きな意味をもつと思います。

授業では、できるだけ生で演奏することを心掛けていますが、ICT も効果的に活用し、時代に応じた音楽科の授業をこれからも目指していきたいです。